

# 朝鮮

## 親子二代の外地生活

愛知県 松原 朗

大正九（一九二〇）年三月、ちょうど私が六歳になったばかりのころ、当時、国策として盛んに喧伝されてきた朝鮮半島への移民に父親の金三郎が応募して、朝鮮全羅南道咸平郡の新光面（村）東井里に、一家を挙げて移った。

私は幼少だったので、はっきりとした記憶は残っていないが、後日聞いた父やその他の家族などの話によると、そのころの日本国内は大変な不景気で、田圃三反歩そこそこの請負百姓では、到底生活していくこと

は困難であった。幸いに父は割合に腕のよい大工であったが、いくらよい職人であっても仕事が無ければ、何にもならなかった。

秋になると、稲作の年貢の取り立てに對して、それが高いのどうのという話し合いが毎晩のようにあり、地主のところへ下げてもらうように日参をしていたが、なかなか思うようにならず苦しいことだらけだった。このような状態で、一生、こんな難儀をしながら朽ち果ててしまうのかと考えると、我が身の行く末が案じられて、どうすべきかと悩んでいたとのことであつた。

そんなときの移民募集であつたので、何も分からない外地ではあるが、思う存分に働いて少しでも前途に明るい生活ができればと決心して、割り当て田圃二町

歩の移民に諸手を挙げて応募したそうである。

当時の移民の応募条件は大変に厳しくて、「必ず夫婦連れで、健康であり、現地ではそろって営農に従事する努力家である」ということが基本条件であって、さらに、「一定の年賦金を払う義務が負わされていた。すなわち、絶対的な信用のある者が選ばれたのである。

移民事業を請け負っているのは、日本政府指定の「東洋拓殖株式会社」という企業で、普通、「東拓」と言っていた。

割り当てられた土地二町歩は、五年間で代金の支払いが完了すると初めて自分の所有地になるという契約であった。一生懸命に努力さえすれば、十年後には大農園の経営者になれるという魅力もあった。

しかも、このことは自分一人の問題ではなく、大きな意味から言えば、我が日本国の繁栄にもつながることであると考えて、大いなる希望を抱いて現地に入ったが、そのスタートは必ずしも生易しいものではなく、「想像は易く、現実には難し」の言葉どおりで、い

ろいろな困難が待ち受けていたとのことである。

入植した東井里の地は、大変な田舎で不便極まりない未開発なところであった。我が家から、約四キロメートルの山道を行ったところに、新光面事務所（内地でいうところの村役場）があり、普通学校（朝鮮人だけの学校）、警察の駐在所、金融組合などの公共機関が、面事務所の周辺に所在し、飲食店を兼ねた宿屋や商店など十五、六軒の家があり、言わばちょっとした町らしいところがあった。新光面事務所、隣の面事務所所在地とを結ぶ砂利道があったが、砂利道と言ってもバスがやっと通れるような狭い道であった。そのバスも小型のおんぼろバスで、一日に一往復ぐらいの運行状況だった。

残念ながら、そこには日本人学童のための学校は無かった。私は止むを得ずに、私たちの家族よりもひと足先に移民として入植していた伯父の家に預けられて寄宿をし、日本人小学校の一年生に入学することとなった。

伯父のところは、同じ全羅南道の潭陽郡水北面古城

里という、我が家からは約六十五キロメートルほど離れているところで、そこには日本人小学校があった。

その学校には三年生の終了まで在校していた。

伯父、伯母は共に優しい人柄であり、伯父は体格がよく普通の人より一回りも大きく、それこそ「気は優しく力持ち」、そのままの人柄であって、よく風呂にも一緒に入り昔話を聞いたものだったが、やはり六歳の子供が初めて両親と遠く離れて生活することは寂しかった。

最初に父が伯父の家まで送り届けてくれたが、帰る際に、「伯父さん・伯母さんの言うことをよく聞いて、頑張れよ！」と言ったことは、今でもよく覚えてい

る。そのうちにこの生活にも慣れて、二人のいとも仲良くなり、転校するまで何不自由なく過ごした。

新光面に新しく、「桂川公立尋常小学校」が完成したので、四年生の新学期からこっちに転校した。この学校は、先生が一人で、校長先生を兼ねていた。生徒は一年生から六年生までで十二人だった。真新しい校

舎は、広い教室兼体育室が一部屋と校長室兼事務室が一部屋で、そこにはちょっとした文庫と物置室があり、その続きが宿直室兼住宅になっていて先生の家族が住んでいた。事務室の入り口左側に、四坪ぐらいのところ有一段と高く土盛りされていて、一メートル四方のコンクリートの建物があった。そこが奉安殿で、御眞影と教育勅語が奉納されていて、非常事態のことを考えて二重扉になっていて、常時錠が掛かっていた。その前に国旗掲揚塔があり、広々とした運動場が続いていた。学校の周囲には桜の木が植えられてあって、すばらしい環境の学校で、こんな環境のところ

で、伸び伸びと勉強し運動ができることが嬉しかった。それでも通学路の長いことと道路が悪いことが、生徒にとっては悩みの種であった。

生徒たちの半数の家は学校から約四キロメートルも離れていて、一生懸命に歩いても子供足では約一時間かかってしまう。しかも、それが山道であるので、家人は事故が起きないようにと、随分と気をもんでいたそうだ。ときには帰り道で、大人に近い大きな

現住民の若者に襲われていじめられたこともあった。日本人の小学生と承知のうえでやって来るのである。相手になってもかなわないので、泣きまねをしながらその場から逃げ帰ったことも幾度かあった。

また、冬期になると約三十数センチメートルぐらいの積雪となるので、道は吹雪のために分からなくなり、雪だまりにはまり込んで身動きもならず泣いたこともあった。履物は、長靴などは無く運動靴に足袋で、靴に付いた雪は凍りついて、学校に着いたころには氷砂糖のようになっていたことなど、冬の通学のつらさは今でもよく覚えている。

無我夢中になって、氷砂糖をくつつけながら学校に着くとみんなも同じありさまで、お互いに顔を見合わせて、つらさを乗り越えて学校にきた感動を味わいながら、いつしか笑顔になっていた。

校長先生はもとより、先生の奥さんまでもストーブの火を絶やさないように付き切りで世話をしてくださった。生徒が気分を悪くしたときには、自宅に連れて行き看病をしたり、けがをしたら薬をつけて手当て

をしたりされた。そんなことから父兄との信頼関係は深まり、学校の行事などには必ず父兄も出席して、いろいろと世話をしていた。特に、春の遠足や秋の運動会は、家族総出の行事となっていた。

このような良い環境と雰囲気の中で、すくすくと育っていく子供たちには、最近、大きな社会問題となっている学校内外での「いじめ」や「登校拒否」などは到底考えられないことである。それは、当時の日本の教育制度が大変に立派であったし、「教育勅語」の教えが徹底していたからにはかならない。

さらに、少人数の生徒数にもかかわらず立派な学校が建てられ、教育内容は本土のそれと全く同じ教科書で教えられていて、いつ、どこに転校しても、学力の差がなく勉強ができたことは有り難いことで、当時の日本の教育制度に対し、ただただ感謝するばかりである。

小学生生活も、大正十五（一九二六）年三月に数々の思い出を残して卒業し、四月には「威平公立尋常高等小学校」の高等科に進学した。学校は、家から約十

二キロメートルも離れているので通学は無理で、また寄宿舎生活となった。

そこは郡庁の所在地で、法務局、郵便局はもとよりのこと各種の公共機関が所在しており、いろいろな商店も百軒ぐらいいはある、にぎやかな街であった。川端の広場に、毎月十日には市がたち大変な盛況であった。

山の中腹を取り巻くように密集して建っている住宅、その一角に広大な校舎と運動場、その裏手には校長宿舎などがあり、ちょっと離れたところに寄宿舎があった。

先生は、校長以下七人で各学年ごとに一人の先生が専任しており、高等科には一人の先生が受け持ちだった。

私が一番心配していたことは寄宿舎での生活であったが、四人の先輩は、我々新入り三人を心から歓迎してくれたので、「案ずるより生むがやすし」であった。先輩は自分の弟の如くに気配りをして、よく面倒をみてくれた。今までの小学校と異なり生徒は約百五十人

ぐらいで、学校らしいにぎやかな生活だった。

毎日の生活は、五十歳近い年配のおばさんが一人で一生懸命に世話をしてくれた。朝は早くから夜は遅くまで、優しく面倒を見てもらったが、時々、不心得者がいると大変に厳しくしかられた。何分、やんちゃ盛りりの生徒が七人もいたので、さぞ大変な苦労だったことと思うが、ふだんはただ黙々として働いておられた。自分たちの両親は月に一回ぐらいいしか様子を見に来ないのだから、今顧みるに、感謝の気持ちでいっぱいである。

学校では、最初は何となく威圧感を受けていたが、生まれつき陽気な性格でもあったので、そのうち雰囲気の中に溶け込むことができたが、学業の方は元々悪い方であったので、先生からよく「これからの日本を背負っていこうとする者が、こんなことでどうする！ しっかりしろ！」と言われて、しかられたことも幾度かあった。普通学校の生徒との対抗競技が時々あったが、「彼らに負けるものか！」という意地を感じるようにもなり、だんだんと心身共に成長をしていき、十

五歳の春に高等科を卒業することができた。

私の実社会での生活の第一歩が始まるのだが、あの未開の片田舎での農業生活では何の意欲もわかず、家に帰る足取りは重かった。

しかし両親は大層喜んでくれ、隣近所の人たちも、「朗さん！ よく頑張ったね！」と、敬意を表してくれたので、自分なりによい気になっていた。

だが、これからの成すべき道が全くつかめずに、ただ漫然と過ごす日が幾日か続き、気持ちはいらいらするばかりであった。

そんな様子を見るに見兼ねた父は、「若いうちに、少しでも勉強をせねば！」と言っていたがこんな田舎なので勉強をしようにもその方法が全く無かった。しかし、ある日の新聞に通信講座のことが出ていたので、早速、手続きをして勉強を始め、次第に興味も出てきたが、一年ぐらいするとだんだんと難しくなり根気が続かなくなった。それは無理も無いことで、一人で勉強をしているので、ちょっと分からないことがあっても、だれに聞くこともできないからである。

そんなときに父が、「お前は偉い、自分一人で勉強をしている。これから、おれも仲間に入るか！」と励ましてくれて、母ともどもに喜んだこともあった。

いろいろと悩んで泣いたことも幾度かあったが、そんなとき、毎日文句も言わずに一生懸命に農作業に精を出している両親の後ろ姿を見て、自分の考えの愚かなことを知った。

昭和七年三月、新光面の普通学校の校長先生から、新設の青年団の副団長を引き受けてもらいたいとのことで、青年団の世話をするようになった。校長先生が団長なので、その指示に従って動けばよいのだが、団長は学校の仕事で忙しく、次第に全部の仕事任せられるようになり誠心誠意の努力をした。青年団の仕事に携わったことで、現地民の若者とも意思が通じるようになり、信頼されるようになった。

一年半ぐらいすると今度は、消防団の副団長の指名を受けた。この消防団の歴史は古く、団長は年配の日本人で立派な人だった。役員は警察署長の任命で、実務は面の駐在所長の指示を受けていた。定期的に訓練

があり、青年団活動より一段と現実的であつて、時局の緊迫感をひしひしと体得した。

年に一回ある郡内の総合訓練で、上位の成績を収めて表彰されたときの祝宴の楽しかったことを今でも思い出す。

外部とのいろいろな交流によつてだんだんと大人の仲間入りができて、現地民とも腹を割つての話ができるようになり、家業の農業経営にも身を入れるようになって両親を喜ばせた。

我が家の営農は、両親の努力によつて成果が少しずつ始めていた。最初の割り当て田圃二町歩の耕作には、まず人手が必要で、近所の部落の人数人に手伝いを頼んだが、何分にも言葉が通じないので、手まね足まねで一から教えたが、一緒に働くうちに次第に意思が通じるようになり、当初の不安も解消し目標も見えるようになってきた。こんな方法から始めた我が家の農業は部落民と一体の農業で、いつしか親類同様の付き合いとなつていた。

入植した当時のこの部落民の生活状況は、全く惨め

なものであつた。約五十軒ほどの家で、年間を通してまともな米食を食べている家は約十軒ぐらいで、大半の家は、秋から正月まで米を食べられればよい方で、一月になると米が少々で粗菜を混ぜたお粥が主食となり、冬期仕事のできない日は一日二食であつた。大人はまだ我慢しても、子供はかわいそうなものであつた。こんなありさまでは、働く意欲も出るわけがなかつた。

そこで、まず第一に、みんなが何とか自給自足できる方法を考へて、「自営農業手間賃の前払い契約」ということを考へ出した。

それは、一斗落（約二百坪）の稲の植付けと三回の除草を条件に、その手間賃として米一斗を前貸しするという契約であつた。それに冬期の仕事として養蚕の飼育道具の作成を考へたが、これは、需要と供給の関係から実効がなかつた。働きたくとも仕事が無いというつらさは、すでに父が内地で経験済みであるので、人ごとではなかつた。

時局はますます厳しくなり、昭和六年九月には満州

事変がぼつ発。増産から統制へと時代が移り、割り当て供出から強制出荷となった。朝鮮半島は日本全国の食糧を賄う役目にあるといわれて、いよいよ責任の重大を感じて、「やれ増産」「やれ供出」と、部落民を励ましたながら東奔西走の活躍をしていたが、ある日、ついに疲労で四十度からの高熱が出て、驚いて医者を呼ぶが、山間僻地の田舎なのですぐに間に合うはずはない。約四キロメートル行ったところの駐在所で電話をかけ、約十二キロメートル離れたところの医者に連絡し往診を頼んだが、医者が到着したのが四時間後であつた。幸いにも大事にならず三日ぐらいで熱も下がり安心したが、現代では想像もつかぬことである。

開拓移民は、いわば第一線で命懸けで戦っている兵隊と同じであると言っても過言ではない。一緒に入植した人たちは、家族の都合とか体力の限界とかで、次々と引き揚げて内地に帰り、残つたのは我が家だけになつてしまった。父は、いろいろな役職にあつた関係から、退植した三軒分の割当地六町歩を引き受けざるを得なくなり、結局、田圃八町歩、畑一町歩となつ

た。その収穫は年間で粃二百俵、蚕繭量が春百貫、秋八十貫になり、全て部落の人の労働で行われていた。部落民の労働力がなければこんな収穫はできなかった。そこで、当初の契約の件数を倍に増やして、常時雇用人二人とし、耕牛引受者、田植え、収穫作業の事前契約者等の選定などで多忙を極めた。

農作業は二月ごろから準備が始まり、十二月の出荷まで大変な作業であつた。冬の間は田圃を耕し、三月中旬から苗代の準備が始まり、五月になると種まき、そして出植え、三回の除草、秋になると稲刈り、干しあげ、粃の脱穀、人力による出荷、当時はすべて人力でこなしていた。そのほかに養蚕の仕事もあり、これがまた大変に人手を必要とする仕事であつた。

部落の人の協力なしでは、到底できないことであつた。時、あたかも戦争の真つただ中で、米の供出については特に厳しく定められていた。指定の日時には必ず出荷せねばならず、山間僻地の田舎から約四キロメートルもの山道を、一俵ずつ背負つて出荷するのは大変なことであつたが、部落民の人たちの体力の強い



のが救いであった。私たち家族の気疲れも並大抵ではなかった。

昭和十四年二月、伯母のめいの美子と、縁あって結婚した。何よりも喜んだのは父であった。当地では一番寒い時期であるにもかかわらずに、家の中の改造や私たちの新居となる家までも造ってくれたことは、今でも忘れられない。娘が来るという気持ちだったそう

だ。  
親類の者は、遠路のために前日から泊まっていたが、花嫁は当日に伯父、伯母に連れられて、山の下のバス停までは車で来たが、それからは山道を登って我が家に着いた。初めて見る田舎のありさまにさぞ驚いたことだったろう。幸いに当日は天候に恵まれて、素晴らしい日だった。

当地のしきたりに従って、近所の人たちを招いたりして、「めでたい、めでたい」と、三日間も祝宴が続いた。二日目は、部落の人たち約三十人を招いての夜も忘れてのにぎやかな祝宴だった。父母はもとより親類一同から、また、大勢の部落の人たちから祝福され

て結婚した私たちは、何となく責任の重大さを感じたものである。

そのころ私は農業実行組合理事役として、農事改良について努力していた。これからの農業は、機械力を活用することが不可欠であると確信し、指導していたが、諸種統制下にある農家で、しかも貧農ではなかなか思うように改善はできなかった。脱穀機、精米機などを導入し、何とか成功した。

一年後に長男が生まれて、いよいよ元氣百倍した。時代は厳しさを増すと共に、私は多忙を極めていた。父は面会議員として、当部落付近に普通学校分校を設けるべく方々に陳情を行い、その努力が実って建設に成功し、部落民は大喜びをしていた。そんな父に負けてはいられないと、麦脱穀機の導入に成功した。

昭和十八年七月、ついに私にも召集令状がきた。炎天下で部落民と一緒にあって、麦の脱穀機を使って脱穀の最中であつた。かねてより覚悟はしていたが、出頭日までの一カ月間は、心穏やかではなかつた。

家のことは、父がいるのでよいが、組合関係の仕事

については心残りがあった。引き継ぎなどで多忙な日を過ごしているうちに、とうとう出頭の日がきた。

父は、「家のことは心配しなくてよい。みんな元気だし、お前も気性は穏やかな方だし、動くことは厭わない方だから、安心して行け。だが、体だけには気を付けよ」と言って励ましてくれた。あの言葉は今になっても忘れられない。門出の際、大勢の見送りの部落民の後ろに、子供を抱いて立っている家族の姿を見たが、その情景は一生忘れることはない。

昭和十八年九月に、竜山陸軍病院に衛生兵として入隊した。病院の一角にあるバラック建ての兵舎が、軍隊生活の始まりであった。

軍医一人、助教の下士官二人で、約五十人の新兵に対し衛生兵として最低必要な、基本教育及び訓練が行われた。猛訓練だったが、間もなく釜山陸軍病院に配属された。やっと一息できるかなと思いきや、そこには病院付の古参兵がいて厳しい指導を受けた。病院勤務よりも内務の方が一層厳しくて、散々にしぼられた。そこも一カ月足らずで、昭和十九年二月に釜山陸

軍兵站病院に正式配属になり、やっと衛生兵としての仕事をすることとなった。

この病院は釜山市営の堂々たる施設で、鉄筋コンクリート三階建てでその一角を兵站病院として使用していた。衛生兵も約百人いて、別棟が兵舎になっていた。曹長を長として二人の班付下士官がいて、内務班は三カ班に分かれていて、なかなか厳しい勤務だった。毎日のように大陸方面から負傷兵、病兵が護送されてきて、症状によりこの病院に入院治療させたり、護送船によって本上へ送ったりしていたが、第一線で、我が身を捨てて勇戦奮闘して不幸にも傷病した兵士にもかかわらず、その扱いは無惨であった。

戦局が厳しくなってきた昭和二十年になると、護送列車はどんどん釜山に入って来るが、護送船の入港はめっきりと減り、たちまちのうちに病院はいっぱいとなり、収容しきれない傷病兵は、釜山市内の学校、教会、寺院等に入れたが、そこもすぐにいっぱいとなってしまった。重症患者は、病院で看病したが、なかなか手が回らずに、「衛生兵殿！ 水が欲しい」とか、

「便所に行きたい！」とかで、てんやわんやの毎日だった。あるときは、不幸にも死亡した兵士の後始末、通夜から葬式そして遺骨の整理までも衛生兵としての任務として実施した。

無我夢中で仕事に追われているうちに、とうとう昭和二十年八月十五日を迎えた。正午に、天皇陛下のお言葉を拝聴して、みんなは、ただただ茫然としていた。

ついに、私の軍隊生活も終わったのだ。これで長かった戦争時代が終わったのだと自分に言い聞かせると、今度は、いつ除隊になるのかとそればかりが気になった。朝鮮からは当然、引き揚げて本土に帰らなければならぬ。しかも、最愛の家族も、この朝鮮にいるのだと考えると、居ても立ってもいられなかった。しかしながら、我々衛生兵はいよいよ忙しくなり、満州や朝鮮の奥地から続々と避難して来る人たちに、釜山港埠頭において、消毒、防疫の業務に従事することになり、当分の間、除隊はお預けとなった。

毎日列車が着く度に、大勢の人の波、悲惨な姿、防

寒頭きんに色あせたリュックサック、片手に子供の手を引き、もう片方の手には破れかけた手提げ袋を大事そうにしている人の列が続く。懸命に叫ぶ避難民誘導係、右往左往する人、その中を物売りする現地民などが交じって騒然とする釜山港埠頭であった。

避難民は、それぞれの援助団体の人たちの誘導で、埠頭内の一角にあったバラックの建物に収容されていた。バラックの中には、重なるようにして抱き合って仮眠する人々で足の踏み場もない。そんなところに三晩も四晩も留められている。バラックの外に一步出れば汚物の山と臭気で、人間として耐えることのできないありさまである。

持参してきた手鍋や飯盒のふたで食事の支度をする女性の姿が、何と哀れなことか。それに、あちらこちらで泣き叫ぶ子供、何を求めているのか悲しい声、何と惨めで悲しい光景、これが戦いに敗れた国民の姿かと思うと、情けなくて涙が出てきた。

そんな状況下で消毒、防疫に従事していたある日、案じていた我が家族と偶然に会うことができた。それ

こそ神仏のお導きであった。その姿は、想像していた以上に惨めだった。これが、あの山間僻地の山奥で、未知、未開の極まりないところで、現地部落民と苦菜を共にして地元の発展に一生懸命に励み、満足とは言わぬまでも、多少の成果を挙げってきた一家の姿かと、涙がとめどもなく流れてきた。

後日、美子から聞いた話によると、終戦のお言葉を聞くやすぐ、現地民でかねて信頼していた者がきて、「今までは、あなたの言われるとおりに従ってきたが、これからは、そういうわけにはいきませんよ」と言ったとのことで、それまでは迷っていた父も、意を決して内地への引揚げの段取りに東奔西走を始めたそうだ。しかし、知れ渡った敗戦の情報は、悪いことばかりで思うように引揚準備もできずに、九月初旬に現地を出発したとのことだった。両親、妻と子供三人、それに妹の七人家族は、リュックサックに食糧を詰めて父が背負い、妹は衣類一式を、幼い二人の子供は美子と母がそれぞれ背負い、雑のうを肩からかけ、防空頭きんをつけてのいでたちであった。

一日も早く本土へと、そのことばかりで、過去、ここを死に場所として一生懸命に働き、そして築き上げた財産（土地・建物・機械道具）を残してきたことは、父や母にとって断腸の思いであったろうと察するのである。

山を下り、汽車に乗るまでに十日もかかり、当地の駅を無蓋車で、畜生同様に扱われてやっと釜山に着いたのであった。

家族再会后一週間ほどたった十二月一日に兵役解除となり、幾多の思いを残して朝鮮から離れることになった。

引揚船は博多港に入港し、埠頭に上陸したのは前半夜の六時ごろだったが、既に日は落ちて暗く、辺りはよく見えなかった。荒れ果てた博多駅構内を見て、本土の荒廃を知った。博多駅から列車に乗ったが、なんとそれは貨車だった。同乗者からいろいろな苦勞話を聞いているうちに、夜中の広島駅に着いた。明かり一つ無いホーム、まばらに目につく電柱にぶら下がっている曲がりくねった電線、黒く焼け焦げている街路

樹、建物らしき物は何にも見当たらず、話に聞いた原子爆弾の威力に驚いた。

太陽の昇るころ岡山駅に着いた。ここは美子の実家のある所、ここで両親たちと別れて下車、歩いて山奥にある実家に向かうが、途中で農家の人から、「自分の息子も出征したが、まだ帰って来ない」と言われて返事もできなかった。大歓迎で受け入れてくれた。お互いの無事を喜び合い、尽きぬ話に二日ほど世話になり滞在した。

再び汽車に乗り、故郷の名古屋に向かったが、国鉄も全く当てにならず、京都までは荒れ果てた客車に乗ったが、買い出し荷物を背負った大人たちは、子供を連れた引揚者などは無視をし、傍若無人の振る舞いで、戦前と戦後の人心の極端な変化を見て情け無い思いをしたものであった。

京都で乗り換えたが、それも満員で、親子で離ればなれになり、お互いに名前を呼び合って所在を確認しながらの車中であった。

荒れ果てた本土の諸々を体験しながら十二月十一

日、やっと懐かしい父の実家にたどり着いた。私の第二の人生の始まりでもあった。

敗戦によって朝鮮から引き揚げて来るであろう私たち一家のために、伯父、伯母は、かねてより古家を改造して受け入れを準備していたが、帰るとすぐに両親たちはそこに入り、私の家族も一緒に生活することとなった。すぐに正月を迎えるというときに、いろいろと配慮してもらったことは、感謝のほかない。一生忘れることのできない正月を迎えて、ただただ感慨無量だった。

新しい生活は、まず食糧確保から始まったが、父は若いころの友人から大工道具を分けてもらい、早速に下駄作りを始め、それを母が行商して食べ物と交換したり小銭にしたりで、朝早くから夜遅くまで懸命になって働いた。私は若いので、何か職に就こうと探しに出たが、八人の家族の生活を賄うような働き口などは無く、やむを得ず、母と行商をすることとなった。

父が言っていた、「稼ぐに追いつく貧乏なし」で、一生懸命に働けば何とかかなると思った。また、「人事

を尽くして天命を待つ」とも考えて、遮二無二働いた。そのかいがあつてか、母がある晩に見せてくれた米は二斗ぐらいあつた。一家は涙を浮かべて喜び、母に感謝をしたものである。今でも思い出すことの一つである。

行商は、はじめは下駄売りからであつたが、商売気の全くない私とその気になつたのは、母の家族を思う熱意と、一生懸命に下駄を作る父の姿に引かれたからである。

あるときお客さんから、「お前の売る下駄の穴は黒いね」と言われたことがあつたが、それもそのはずで、穴を開ける道具が無くて、焼け火箸で穴を開けていたからである。

また、親せきから約三反歩の畑を譲ってもらい野菜などを作り、あの敵しかつた食糧難の時代を何とか乗り越えることができた。あるとき、真っ赤なトマトがとれたので大事にカゴに入れて母が行商に出たところ、途中の広い屋敷の一角に見事な柿がなつていたので、訳を話して行商用に分けてもらいたいとお願ひし

たところ、けんもほろろに断られたと、母は涙を流して話していた。

父は口癖のように、「自分は中年時代を外地で過ごしたので、地元の衆のためには何一つできなかった。

お前はこれからだ。頑張つて衆のためになることをやってくれ」と言っていた。この言葉を肝に銘じて、変わりゆく戦後の厳しさに対応するには、今までの行商では駄目で、見切りをつけざるを得ないと思い、知人の紹介で地元の農業協同組合に勤めることとした。

その後、いとこの経営する会社に移り、以来、昭和五十二年六月まで、自営業のつもりで一生懸命に働いてきた。

我が家の子供たちもそれぞれ職に就き、やっと一息つけるようになった。これもみんな家族が健康に恵まれていたお陰であり、多くの方々のご加護の賜であると感謝するばかりである。

しかし、私には父母をはじめ、妻や、そしてその他の大勢の人の引揚げの苦勞を忘れることはできない。

山間僻地の山奥で、言葉も生活環境も異なる地で、死

に物狂いの働きをし、人生の大半を捧げた、大きく言えばお国のために尽くした努力、各自も大なり小なりの地位、財産を築きあげたが、それらは一体何だったのであろうか。それを思うとき、胸が痛むのである。

昭和五十四年四月、私は友人を誘って、当時の現地の状況を見に行った。そのときにこんなことがあった。

部落の入口に建っている学校の前を通ると、若く立派な身なりをした二人が立っていたが、その人はその学校の先生で、私たちが来たことを知って会いにきたのである。先生は、「松原さんですか。あなたのお父さんには当時、大変なご尽力をいただき、このような田舎にこのように立派な学校を建てていただき感謝しています。ご本人ではないが、息子さんでもいいから是非会って感謝の意を述べたいと校長先生がお待ちです」という話だった。何と嬉しいことかと、感動させられた。外地でも、誠意を尽くしたことは幾久しく残るといふことを、痛感させられた。